

リリマジ8開催記念

それと映画公開、

ゲーム発売とか色々記念

前日十三日の

仕事中に書いたM

メッセージペーパー
P

なのはBOA／SSS

暗黒混沌バレンタイン

北乃ゆうひ

「チョコレートが欲しい」

唐突に、それはそう言った。

どこにでもあり、どこにも存在しないはずの空間の中で、自我を持つ三体の存在。その一つ――『王』を司るものの突然の言葉に、もう一つ『理』を司るものが呆れたような顔をする。

「あなたは突然何を言っているのですか？」

「オリジナルのメモリの中にある

のだ。今日という日はチョコレートの日である」と

「チョコレート!？」

尊大に答える『王』に反応するように、最後の一つ『力』を司るものが二人の間に入ってきた。

「食べたいっ！ 僕も食べたいっ！」

「決まりだな。『理』よ。手に入れて来い」

「また無茶苦茶を言いますね『王』^{あな}も」

嘆息し、『理』が問う。

「そもそも、どうやって調達しろと言うのですか？」

ここは現ではないが、さりとて夢でもない。存在しないことが決定付けられている存在しない次元だ。存在しないものが存在する追放領域と言い換えても良いだろう。

「僕、『力』だからわかんない。考えるのは『理』の仕事でしょ？」

元よりあなたには期待していません――それは口に出さずに、『王』へと視線を向ける。

「何を期待している？ 力も知性も、全てが私の腕であろう？ それらに考えろと、我は言っているのだ。我に問うのはお門違いであろう？」

「……では、私の好きなようにやれさせてもらいます」

「ああ。上等なものを調達してくるようにな」

大仰に笑う『王』と、

「チョコレートっ♪ チョコレートっ♪」

その横ではしゃいでいる『力』を見て、『理』は再び嘆息すると、スーッとその場から姿を消した。

材料を見つけ出すのは、存外難しいものではなかった。

どういう理由で追放されたのかは不明であるが、カカオや、そも

そもチョコレートそのものまでここには存在しているのだ。

渡そうとして渡せなかった存在そのものや、作ろうとして用意したものの何らかの要因で捨ててしまった存在^{ざいりよう}。在^{ざいりよう}なのだろうが。現実世界において実物そのものはただのゴミに成り下がってしまったのだろうが、そこに存在していた思念というものは、そんな捨てた物に宿って、ここへと流れ着いた。そんなところだろう。

「だとすれば、これらには変な妄執^{ごうし}などが籠^{かこ}っているのでしょうか」それは少々使うのが怖い——そう考えてから、『理』は自嘲した。「そもそも私たちも、妄執^{ごうし}の塊^{かたまり}ではない——そう言われてしまえば、その通りなのかもしれませんけれど」

自分達はすでに闇の書の主——いや、今は夜の魔道書の主か——達に敗北した。結果として、自

我だけがこのどこもしれぬ空間に漂っている。それが今の自分達だ。『力』はともかくとしても、『王』はそのくらしいのことに気がついているだろう。

「だからこそそのチョコレート……なのかもしれません」

モデルベースとなった高町なのはのメモリから、チョコ菓子の作り方を引き出して、適当に作り上げていく。

幸いにして、キッチンもまたこの領域には存在していたのだ。

現実^{ゲンジュ}から取り除かれた存在たちは、何らかの要因で呼び戻されるか、現実^{ゲンジュ}が終了するまで戻ってくることはない。

ならば、自分達が望むのは、呼び戻しかそれともゲームオーバーか。

「なぜでしょう。不思議と、私はどちらでも良いと思ってしまっています」

強き者達と再び合^あい見^まえる機会^{きかい}は失われてしまうのかもしれないが、自我がこうして残り、他のマテリアル達ともここで暮らすのも存外悪いとは思わない。

「もう戻れないと知ったら『力』は泣いてしまいかもかもしれませんね」

思わず小さな笑みを浮かべる。

見た目以上に子供のような精神をしている彼女のことだ。手のつけられない駄々をこねるかもしれない。

「ふむ——記憶の中にある見様見真似^{まね}ではありますが、上出来……：でしようか」

出来上がったチョコレートケーキに一応の納得をしてから、近くに漂っている箱やラッピングの材料を集めてきて、軽くラッピングしてみせた。

「破壊と破壊に勝るものではないかもしれませんが、創造も中々に面白いですね」

満足げに『理』は微笑んでから、はたと、気がついた。

「しかし、一つ分しか作りませんでした、『王』と『力』では二つに分け合うという発想は出てこないでしょう」

困りました——と、そう思ったとき、『理』に視界に漂っているそれを見かけて、彼女は思わず手を伸ばした。

「お待ちせしました」

「おかえり〜『理』」

元の場所へと戻ってきた『理』の手には、二つの包み。

一つは青地に黒のリボンでラッピングされた手製のケーキ。

もう一つは、漂っているのを持ってきただけのチョコレートだ。こちらは夜色の包装紙に月をあしらったシールが貼ってある。

「思ったよりも早かったな」

「ええ。探せばこういったものも

この領域に漂っていましたので」

そう言つて、ケーキを『力』に、包みを『王』と差し出した。

「えへ……ありがとー♪」

「良くやった。褒めてつかわす」

「もったいないお言葉——とでも言えばいいですか？」

「わかつておるではないか」

上機嫌に『理』から包みを受け取ると、以外にも丁寧に包装を解いていく。

「何面食らった顔をしておる。我が丁寧に封を切るのが不思議か？」

「ええ——まあ」

「ふん。八神はやての一部分なのだろうよ。せつかくお前が手に入れたきたキレイな包装を乱暴にするなど、訴えてくる」

まったくもって不愉快だ——そう口で言いながらも、表情は嬉々としていた。

一方の『力』は、完全に子供の開け方だ。ビリとやってガバッと

開けている。

そして、躊躇うことなくケーキを手掴みにして、口へと運ぶ。手や口をベトベトにしながらも嬉しそうに「美味しい美味しい」と言いながら食べて貰えるのは、悪い気分ではなかった。

「『力』、あとでちゃんと手と口を拭くのですよ」

「は〜い」

本当に分かっているのか、『力』は手を挙げて元気良く返事をしてくる。

やれやれと嘆息をすると、『王』が歪な形をしたハート型のチョコレートを手に入っていた。

「我の方は外れか」

「すみません。中身まではちゃんと把握できていませんので」

「構わぬ。選ぶこともまた醍醐味ということにしておこう」

そうして、『王』はそれを口に運び——

「じゃあもういい!!」

悲鳴を上げるのだった。

倒れた『王』の傍に落ちたチョコレートを『理』は手に取る。

歪なハートに描かれた「すずかへ」という文字を見て、『理』はこれが何であるか理解した。つまるところ、これはアリサ・バニングスが追放したくなるレベルでの失敗作なのだろう。

のたちち回る『王』を見ていると、『理』の中にある高町^{オリジナル}なのはの一部が表面に浮かびあがり、思わず『理』の口から言葉が漏れる。「アリサちゃん……何を入れて、どう作ったの?」

その答えは、この領域には存在しなかった。

【Happy ? Valentine - closed.】

あとがき mini

本日は新刊・執事の馬鹿力のお買い上げありがとうございます。

そんなわけで、構想三十秒執筆四十七分の掌編お届けしました。

本MPは、執事の馬鹿力書き下ろしの続編というか外伝のような内容になってますので、まあアレです。出来ればそちらを読んてから読むことをオススメします。

あとがきで言う内容じゃないですね。本編読む前にコレを読んじやった人、すみません。別にネタバレするような内容ではないので、そもそもこの話、内容なんてあつてないような内容ですの——シヤレじゃないですよ——適当に力を抜いて読んで下さい。

ところで話題は変わりますけれども、本誌のあとがきで、なのは

BOAって世紀末ゲー? みたいなネタを書いてましたが、実際にやってみるとそうでもないですね。

そういう話題が一人歩きしちゃってる感じです。シグナム・フエイトが2強で感じですけど、強烈なネタを使わない場合は、そこまでひどくないです。バランス調整のツメは若干甘い感じもありますが、キャラ物対戦ゲーとしては良ゲーな方ですね。

では、そろそろ紙面が付きそうなのでこの辺で失礼します。

ところでまだ映画見てないんだよね。並み居る原作ヒロインを差し置いて銀幕デビューした愛さんの姿を拝みたいっ! あと鮫島さんの姿も! (お

あ、この紙、字がとんでもなく小さく、読みづらくて、本当申し訳ない(今更謝るのかよ!)

【14/02/2010 ヲリヅ 8 - MP -

Aiogaki mini - closed.】

